

## 水稻新奨励品種「秋田59号」の特性と栽培法

田口光雄・京谷 薫

(秋田県農業試験場)

Characteristics and Cultivation Method of a New Rice Cultivar "Akita 59"

Mitsuo TAGUTI and Kaoru KYOYUA

(Akita Agricultural Experiment Station)

### 1 はじめに

県内の水稻うるちの品種別作付面積割合は、「あきたこまち」が80%を越え、「ササニシキ」、「ひとめぼれ」を加えると、この主要3品種で90%以上を占めている。今後ますます激しくなる産地間競争を乗り越えるために、バランスのとれた品種構成をとり、良質良食味米を安定的に生産することが重要である。

「秋田59号」は中生の晩の良質良食味米で安定多収の品種で、「あきた39」に代わって作付けが見込まれる。「あきたこまち」との熟期の違いから作業の分散や作期の拡大、異常気象時における被害の軽減等をねらいとして、需要動向に即した良質米の安定生産が期待できることから、平成1999年4月、秋田県の奨励品種に採用された。

ここでは1995年から1998年までの奨励品種決定試験での成績と1997年、1998年に行った施肥反応試験の結果から「秋田59号」の主な特性と栽培法について報告する。

### 2 試験方法

#### 1) 奨励品種決定基本調査 (1995~1998年)

なお蛋白質含有率や味度値は、1993年、1994年の育種生産力検定標肥の成績も使用した。

#### 2) 施肥反応試験 (1997~1998年)

稈長は「あきた39」並で、耐倒伏性は「あきた39」並の“強”である。穂数は「あきた39」より多く、「あきたこまち」より少ない“中間型”である。障害型耐冷性は「あきた39」より改善されていて、「あきたこまち」並の“中”と強くなっている。収量は「あきた39」をやや上回り、千粒重が大きく、品質も安定して良い。

表2 特性一覧

品 種 名	秋田 59号	あきた 39	あきた こまち	サ ニ シ キ
出 穂 期(月日)	8.10	8.07	8.06	8.09
成 熟 期(月日)	9.29	9.27	9.25	10.03
稈 長 (cm)	77.8	75.7	88.2	83.7
穂 数(本/㎡)	413	394	439	498
倒伏程度(0-5)	0.0	0.1	1.6	1.1
耐 倒 伏 性	強	強	中	弱
耐 冷 性	中	弱	中	やや弱
穂 発 芽 性	中	中	やや難	易
葉 い も ち	やや弱	やや強	やや弱	弱
穂 い も ち	やや弱	やや強	やや弱	弱
玄米収量(kg/a)	64.8	63.5	57.1	61.1
千 粒 重 (g)	23.6	22.8	22.2	22.6
品 質 (1-9)	3.2	3.4	3.3	4.9

注. 調査場所及び年次: 秋田県農業試験場奨励品種決定基本調査標肥区1995~1998年の平均

表1 試験区の構成 (窒素成分量kg/10a)

①1997年			②1998年		
基肥	幼穂 形成期	減 数 分裂期	基肥	幼穂 形成期	減 数 分裂期
7	0	2	5	2	2
	2	2		0	0
9	0	2	7	2	0
	2	2		0	2
11	0	2		2	2
	2	2	9	0	2
移 植 日: 5月13日			移 植 日: 5月14日		
栽植密度: 23.1株/㎡			栽植密度: 22.9株/㎡		

### 3 主な特性及び栽培法

「秋田59号」の出穂期は、「あきた39」より3日遅く、成熟期は2日遅い、「ササニシキ」並の中生の晩である。

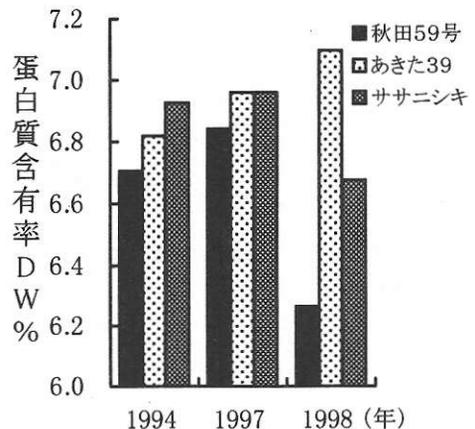


図1 白米蛋白質含有率  
\*インフラライザーの窒素含有率  
×蛋白質換算係数5.95

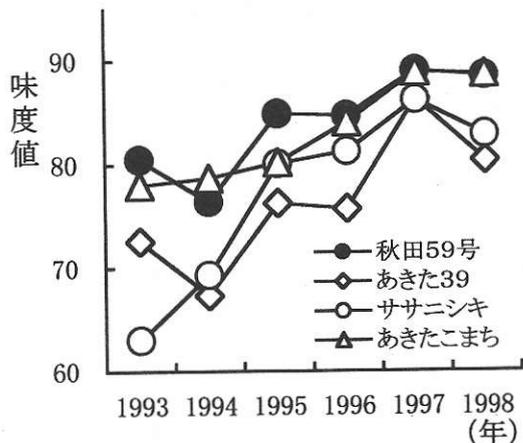


図2 味度値  
\* 東洋精米機製作所の味度メーターで測定

食味関連形質として白米の蛋白質含有率が「あきた39」より低く、味度メーターなどの食味計では「あきた39」や「ササニシキ」よりも良好である。栽培見込み地帯は秋田県内平坦部一円であるが、中生の晩で熟期が遅いので、トヨシキが十分登熟する地帯で栽培する。

「秋田59号」の生育は、「あきたこまち」並の基肥窒素量で容易に茎数が確保でき、葉色は「あきた39」と同様に淡く推移する。「あきたこまち」に比べ、穂数はやや少なく有効茎歩合は低いので、有効茎歩合を高める肥培管理が必要である。

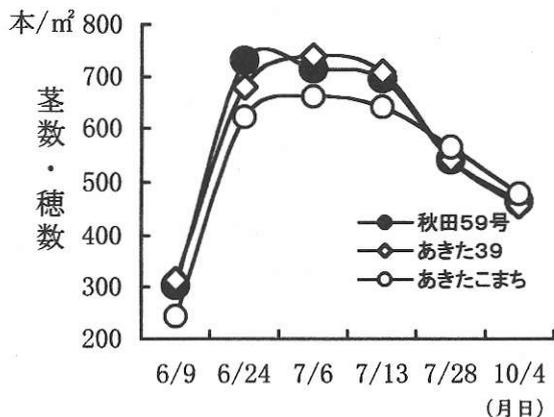


図3 茎数・穂数の推移 (1998)  
\* 基肥窒素量 7 kg/10a

幼穂形成期の葉緑素計値と幼穂形成期追肥の有無による倒伏程度との関係では、茎数が600本/m<sup>2</sup>以上で、幼穂形成期の葉緑素計値が42以上の時に追肥すると、倒伏程度が大きくなり、品質は未熟粒などの増加により低下するので、

幼穂形成期の追肥はしない。多基肥や、幼穂形成期と減数分裂期の2回追肥で収量が増加したが、品質は低下した。品質を考慮した場合、基肥窒素量 7 kgに減数分裂期追肥を基本とするのが良い。

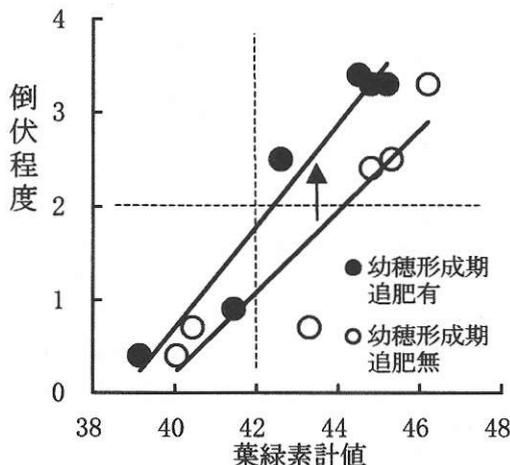


図4 幼穂形成期の葉緑素計値と追肥による倒伏  
\* 倒伏程度 (0-5)

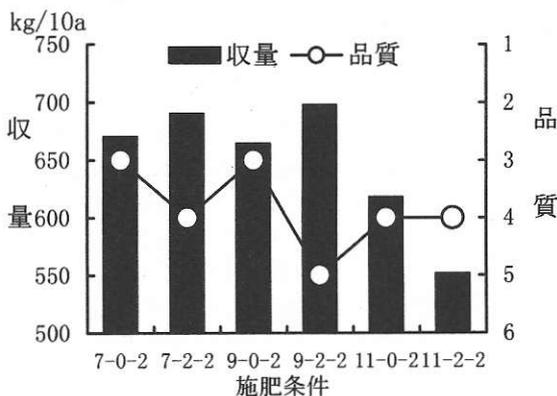


図5 施肥条件による収量と品質 (1997)  
\* 施肥法は基肥-幼穂形成期-減数分裂期 (窒素成分量 kg/10a)  
\* 品質: 1 (良) ~ 9 (不良)

#### 4 ま と め

以上のことから、「秋田59号」は、「あきた39」に比べ、食味・品質や耐冷性が改善され、「あきたこまち」並の施肥量でも茎数が容易に確保でき、千粒重が大きいなどの点から多収となる。「あきた39」より栽培しやすくなっているが、品質を考えると、「秋田59号」の栽培は、極端な多肥は避け、「あきたこまち」並の施肥条件で、減数分裂期追肥を基本とするのが良い。